

Bulletion of Kagoshima  
Prefectural Archaeological Center

# From JOMON NO MORI

No. 16 CONTENTS

Cave ruins in Kagoshima Prefecture.

Yubasaki Tatsumi

Supplement to the Komaki site and some consideration

The research department of Kagoshima Buried Cultural Property  
Reserch Center

The pit dwelling house which is in the Kofun period excavated  
in Komaki remains in Kagoshima Prefecture

Kawaguti Masayuki

Investigation of Uwai Castle Ruins in Kirishima City

Kurokawa Tadahiro

Study on the route between Satuma koku Taki and Nodae

Higashi Kazuyuki

Annual of Kagoshima Prefectural Archaeological Center of the  
4nd year in Reiwa.

Kagoshima Prefectural Archaeological Center  
October 2023

研究紀要・年報

# 縄文の森から

From JOMON NO MORI

第16号

鹿児島県の洞穴遺跡の集成  
—洞穴遺跡の概要と調査の状況—

湯場崎 辰巳

鹿屋市小牧遺跡の補遺と若干の検討  
(公財)埋蔵文化財調査センター 調査課

鹿屋市小牧遺跡で検出された竪穴建物跡 (SH20) の性格について

川口 雅之

霧島市上井城跡の踏査

黒川 忠広

薩摩国高城—野田間の道筋について

東 和幸

令和4年度 年報

鹿児島県立埋蔵文化財センター  
2023.10

研究紀要・年報

縄文の森から

第16号

二〇二三

鹿児島県立埋蔵文化財センター

## 『縄文の森から』第16号 目次

---

---

鹿児島県の洞穴遺跡の集成一洞穴遺跡の概要と調査の状況一

湯場崎 辰巳・・・・・・・・ 3

鹿屋市小牧遺跡の補遺と若干の検討

(公財) 埋蔵文化財調査センター 調査課・・・・・・・・ 17

鹿屋市小牧遺跡で検出された竪穴建物跡 (SH20) の性格について

川口 雅之・・・・・・・・ 35

霧島市上井城跡の踏査

黒川 忠広・・・・・・・・ 41

薩摩国高城一野田間の道筋について

東 和幸・・・・・・・・ 49

令和4年度年報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 69

---

---



# 鹿屋市小牧遺跡の補遺と若干の検討

(公財) 埋蔵文化財調査センター 調査課

Supplement to the Komaki site and some consideration

the research department of Kagoshima Buried Cultural Property Reserch Center

**キーワード** 小牧遺跡報告書刊行後の補遺 弥生時代前期～古墳時代初頭の線刻土器 弥生時代の凹線文土器 刻目文土器 干河原段階の土器 縄文時代後期前半の折衷土器 縄文時代後半の石皿を伴う遺構 内湾する深浦式土器 周辺地形 元禄期における日向国と大隅国の国境

## はじめに

小牧遺跡は鹿屋市申良町に所在し、東九州自動車道建設(志布志IC～鹿屋申良JCT間)に伴って平成27年7月～平成30年2月に発掘調査された。その後、整理作業を進め、時代ごとに4回に分けて発掘調査報告書(以下、報告書と略し、必要によって発行Noを付す。)を刊行し、令和5年3月刊行分で全ての報告を終了した(公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター2020, 2021, 2022, 2023)。既に刊行した報告書に掲載すべきであった遺物など、後日確認した資料については、報告書4の補遺に記載した。さらに、収納作業を進める中で重要性を確認した資料が出てきたので報告することとする。併せて、報告書4のレイアウト後に修正が生じた遺物や、検討できなかった事項などについても紹介したい。

なお、本稿では報告書と重なる内容や写真、参考文献等については省略しているため、報告書と併せて一読いただきたい。

## 1 弥生時代古墳時代の遺物

### (1) 細沈線文のある壺形土器胴部

1(8850と注記)と2(8T-2と注記)は丸みをもつ小型壺形土器(以下、形土器を省略)の胴部片で、胎土の混和材の特徴から同一個体と考えられる。細沈線による線刻状の文様を施す。文様は最大径のあたりに平行線を描き、その上下に展開されると推測される。『小牧遺跡3(弥生時代～古墳時代編)』の竪穴建物跡13号から出土した壺の胴部片(報告書3掲載番号226)に形態や文様の特徴が類似する。竪穴建物跡13号は東原式土器のなかでも新しい形態の土器を主体として伴い、古墳時代前期末ごろから中期初め頃に帰属すると考えられる。そのため埋土中から出土した226については、遺構よりも古い時代の遺物である可能性が報告された。既報告の226は、胎土の特徴から1や2とは別個体と判断した。胴部が張り出す形態と文様の特徴から、弥生時代前期の土器の可能性もある。本遺跡からは高橋Ⅱ式と考えられる甕や小型の壺が『小牧遺跡3』に報告され、また、突帯文系の土器が『小牧遺跡4』に報告されており、それらと同じ位の時期の遺物の可能性もある。1, 2の時期

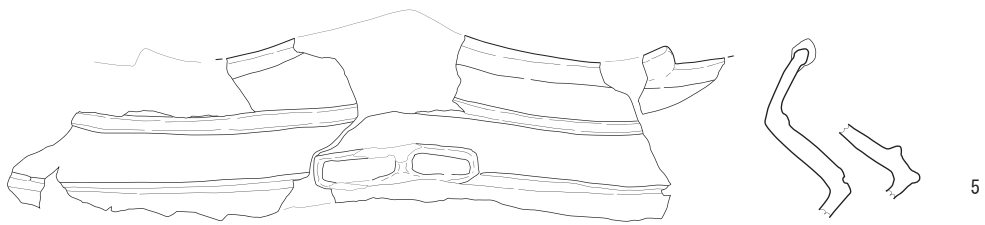
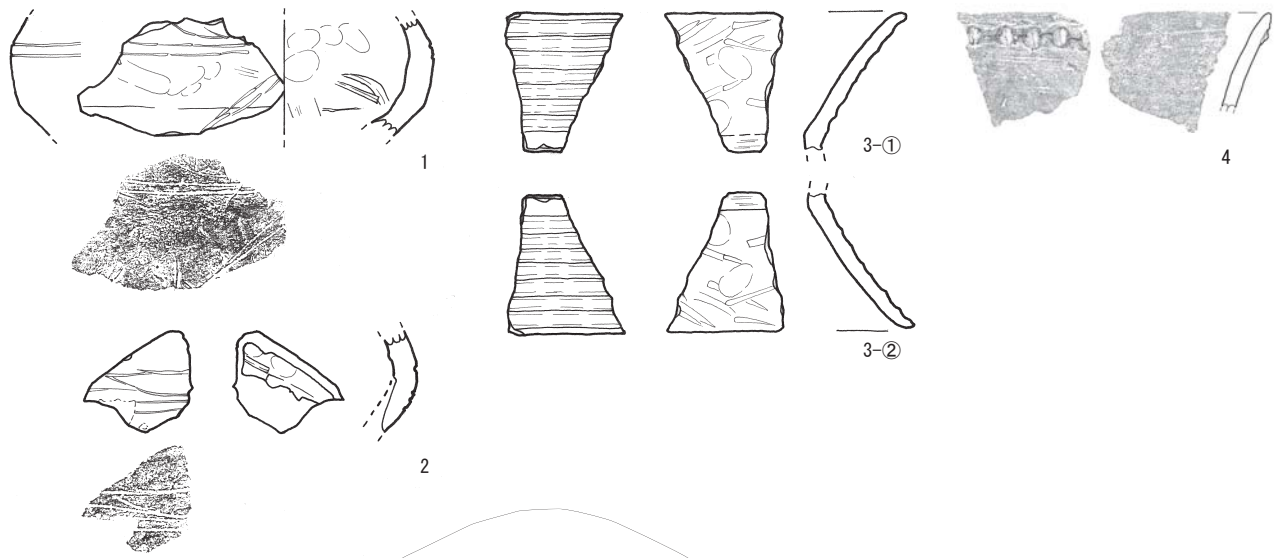
については、全形が不明であることから、弥生時代前期～古墳時代初頭までの時間幅をもたせておきたい。

### (2) 凹線文系の壺形土器口縁部

3(18324と注記)は壺の口縁部片もしくは高坏の脚部である。口縁部ならば、外反しながら開き口縁端部が先細る。器壁は5mm程度と薄く、焼成が良く硬質である。外面のほぼ全面に横位の5mm幅の凹線を密に、多重に施す。凹線の稜は滑らかで、指頭によって施されたと考えられる。外面はナデ調整で内面はミガキの後にナデ調整を施す。粘土の継ぎ目で剥離し、接合面は丸く凹む。文様の特徴から、弥生時代中期後半の瀬戸内系の凹線文土器の影響を受けた遺物と捉えた。本遺跡から出土した同時期に位置づけられる山ノ口式土器と比較すると、胎土の色調は暗く、角閃石や火山ガラスを多く含んでいる。より精緻なつくりからも四国地方や九州北東地域からの搬入品の可能性が考えられる。出土地点はD11区であり、弥生時代中期の分布域と重なることから、山ノ口式土器に伴うと考えられる。

小牧遺跡の近隣でのこれらの地域と関連のある土器の出土事例としては、鹿屋市王子遺跡で、山ノ口式土器とともに、大きく開いた口縁の端部を肥厚させて凹線文を巡らせる壺形土器、口縁部内外面に凹線文をもつ長頸の壺の口縁部～頸部片、凹線をもつ脚片などが瀬戸内系の搬入の可能性のある遺物として報告されている。3とこれらは口縁部あるいは脚部の外面に幅広く多重の凹線を巡らせる特徴が類似する。ただし、王子遺跡の例は口縁部直下に無文部分を残す。また、王子遺跡の例は口縁・脚端部が「コ」の字状の断面形を呈するのに対し、3は先細る形態で器壁も薄い。3の開く角度は大きく、王子遺跡出土土器と比べると脚の形態に近い。脚の可能性もある(3-2)。凹線文土器は瀬戸内地方との関わりが考えられ、志布志市稲荷迫遺跡で出土した岡山県に標式遺跡がある前山Ⅱ式土器や(鹿児島県立埋蔵文化財センター2012)、大崎町麦田下遺跡で出土した西南四国型甕(大崎町教育委員会2014)などと同様に、中四国地方との交流を示す一例となった。

本遺跡では、同じ時期の須玖式系土器の搬入も認められ、さらに、弥生時代後期～古墳時代前期の縄文を施文した東海系壺の口縁部や、古墳時代前期の布留模倣甕も



第1図 縄文時代晩期末から古墳時代初頭の土器



出土している。3もこれらと同じような遠隔地域との関わりがある遺物として追加して報告したい。

### (3) 遺構内出土の刻目突帯文土器

4（報告書4掲載番号1595）は、土坑62号から出土した土器であり、レイアウト後に図面のみ確認し、補遺として掲載した。報告書刊行後、実物資料が確認できたので今回報告する。4は外反気味に開く口縁部で、口唇部下7mmに突帯を巡らし、爪のある指先で刻目を施す。口唇部は尖り気味に丸く収める。内外面とも横方向の条痕による調整である。胎土は石英と火山ガラスが目立ち、色調は淡黄色を呈する。一条突帯のままなのか、二条突帯となるのか不明であるが、弥生時代早期～前期前半に位置づけられる。4が出土したフラスコ状の土坑は、県内では類例が少なく、単独ではあるが他の例のように貯蔵穴の可能性はある。

## 2 縄文時代晩期末と前期末の遺物

### (1) 晩期末の方形浅鉢形土器

5（報告書4掲載番号1532）は、レイアウト時に3つの破片に分かれていたものを、図上での復元図を基に石膏復元していたところ、6と同様に接点が見つかったものである。レイアウト時では最大幅30cmを想定していたが、36cmに改めることとなる。上面観は方形をなし、角に当たる部分に眼鏡状の浮文が付く。ここは胴部屈曲部に当たり、他の辺は緩く波打っているが、角の部分は若干高くなっている。口唇部に付く突起は片鱗状と考えられ、波頂部を中心線として線対称の位置にもう一方の片鱗状突起が付くと想定される。また、波頂部には他の事例を参考にすると、リボン状の突起が付く可能性がある。

る。なお、浮文や突起を施す位置は、全体の中で1か所のみではないかと考えられる。干河原段階における浅鉢形土器の多様な一面を示す例となった。

### (2) 深浦式土器の完形に復元した資料

6は、レイアウト時に3つの破片に分けて報告したものの（報告書4掲載番号57, 58, 59）を、復元想定図を参考にせず、土器に対して素直に石膏復元していたところ、胎土を基に集めておいた破片との接点が見つかり、口縁部と胴部が繋がったものである。それまで何度も試みた接合では繋がらなかったものが、石膏復元を試みたことにより、三次元的な見方ができたことでわずかな接点を見出すことができた。口縁部と胴部は繋がったが、無文の底部までは繋げることができなかった。分類の際、有文と無文に分けたためであり、胎土で分けていれば土器片同士が離れることはなかったと思われる。これらは思いがけない発見であり、希少な遺物はもちろん展示や貸し出しに使われるような土器の復元作業には有効であると考え。本題から逸れてしまったが、保存・活用までが埋蔵文化財センターの役割なので記しておく。

6は高さ20.6cm、口径15.8cm、最大径18.7cm、括れ部18.3cmに復元された。口縁部は内湾するものの、口縁部下のくびれはそれほど明確でなくなった。主文様は深浦式土器の日本山段階と変わらないが、口縁部形態、口縁部外面の沈線による鋸歯状の文様、口縁部内面の一部に文様を入れる点など、新たな様相が加わっている。縄文時代前期末から中期前半にかけての土器研究において、良好な資料の一つになると考える。



第2図 縄文時代前期末から中期前半の土器

### 3 縄文時代後期前半について

#### (1) 集落の概要

小牧遺跡における縄文時代後期前半は、遺構数や遺物量の多さとともに、その内容は多彩なものであり、今後の縄文集落の研究に寄与するものと考えられる。径100m近くを90cmほど掘りくぼめた円形窪地があり、周縁には24基の竪穴建物を配し、中央部分を中心に石皿立石23基、石皿配石22基、準配石9基、礫集中38基が分布する。

時期は宮之迫式土器期（1期）、中原タイプを含む指宿式土器期（2期）、小川添式土器と呼ばれていたものを含む松山式土器期（3期）の3時期にまとまる。遺構内で違うタイプの土器と一緒に出土する例もあり、限られた時期の中での土器編年や地域間での土器変異を考える上で良好な遺跡である。また、石器については、敲石への転用品を含め磨製石斧や石錘などが多く出土し、山にも川にも近い自然環境を活かし、安定した暮らしがあったと考えられる。特に石皿は、素材の搬入から使用後に割る行為や、遺構への非日常的な利用まで進めることができる。

第3図のような円形の集落構成はもとより、大珠形の石器や回転施文による土器など、東日本の文化を受け入れながらも地域に合った生活を営んでいたと考えられる。

#### (2) 指宿式土器と松山式土器の特徴を併せ持った口縁部片について

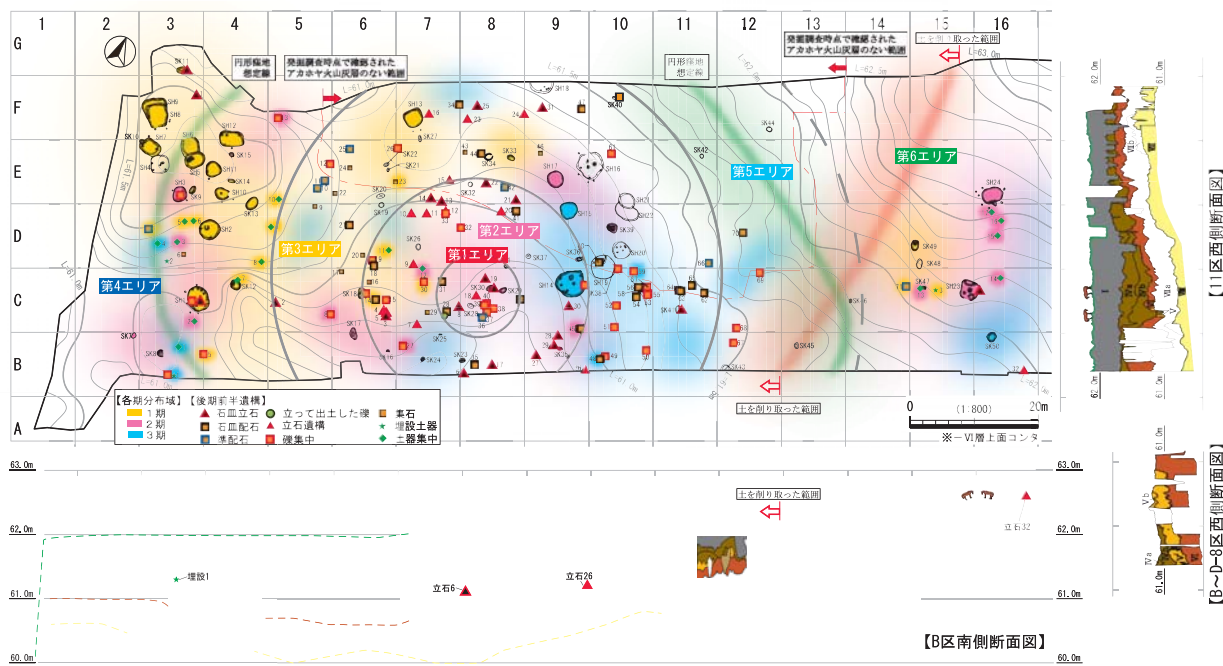
7（30900と注記）は円形窪地の中心からやや西側にあたるD-6区の、遺構・遺物の密度がやや薄い第3エリアのIVb層から出土した。近くからは石皿立石10号・11

号、石皿配石10・11・25号、礫集中12号が検出されている。

7は口縁部片で、口縁部外面を肥厚させて胴部とは別の文様帯を形成するタイプである。口縁端部を欠くため口縁部文様帯の幅や全容は不明だが、横位の沈線文と巻貝による連続刺突文が文様帯を構成する要素であることが分かる。胴部外面にはやや太めの平行沈線による文様を描く。外面の形態と文様の特徴は報告書4の中でⅧa類とした志布志市中原遺跡VA、VB類に類似する指宿式の時期の土器に該当する。口縁部内面にごく緩い稜を形成して外反し、稜よりも上位に横位の沈線とその上に円形連続刺突文を巡らせると推測される。本遺跡のⅧa類にはほかにも口唇部に凹線を巡らせるものや、わずかに肥厚させた口唇部に凹線と連続刺突を施すもの（報告書4掲載番号780）がみられ、凹線を口縁端部よりもやや下がった位置に巡らせるもの（報告書4掲載番号776）も出土している。

#### (3) 折衷土器の検討

このような上面施文型の口縁部は、IXa類とした松山式の古手のタイプに位置づけられる特徴である。これまでの研究において河口貞徳氏は、口唇部分に平坦面をつくり沈線を巡らせ、胴部に指宿式の文様をもつ志布志市倉園遺跡から出土した深鉢を松山式の祖型として捉え（河口1981）、本田道輝氏は南九州市川辺町田中堀遺跡出土の上面施文型の土器について寺師見國氏が小川添式と仮称したタイプ（寺師1943）に該当するとし、「指宿式土器の型式としての概念が崩れ、新しい要素が付加される土器から派生」し「指宿式土器を基礎としつつも強い外



第3図 縄文時代後期前半の遺構配置図

的要因による変容によって生じた（あるいはその過程にある）土器群」と考察した（本田1983）。

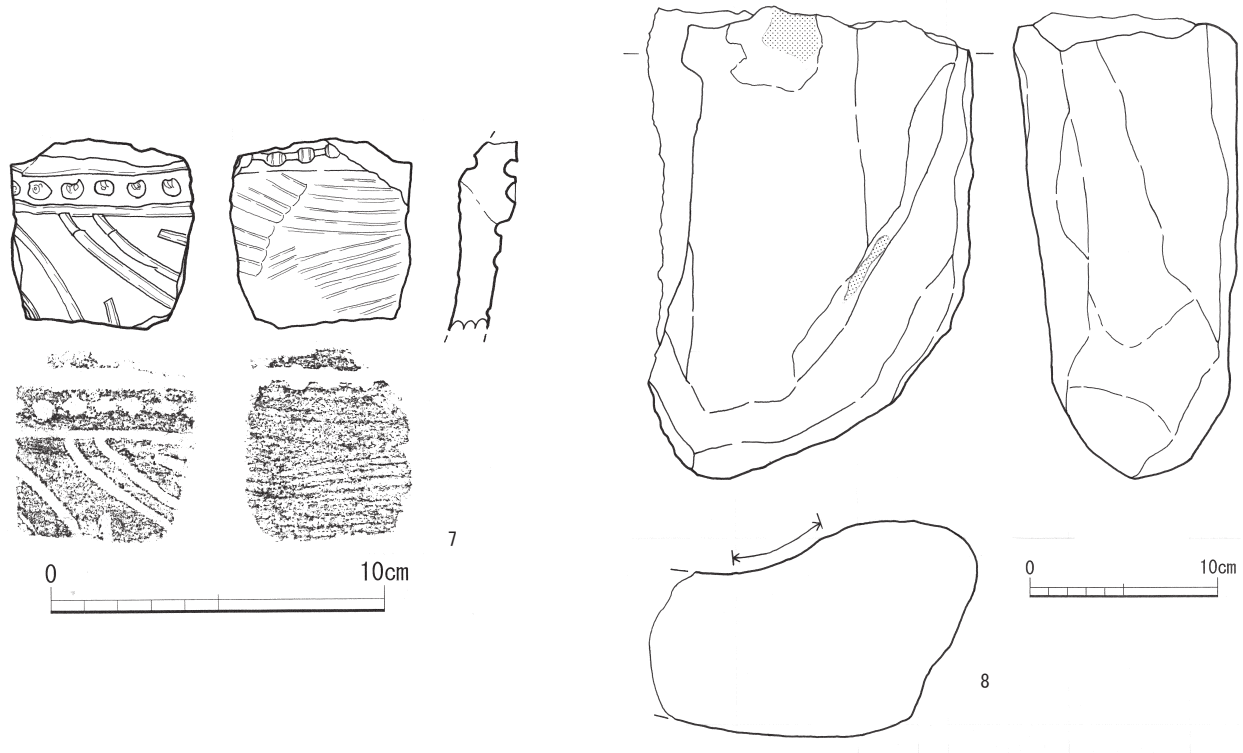
第6図は、小牧遺跡Ⅷb類に類似する口縁部外面を肥厚させて胴部とは別の文様を描くもので、志布志市中原遺跡や本遺跡にみられるタイプ（中原タイプと仮称する）と指宿式土器の文様をもつ口縁肥厚タイプ（以下、「肥厚タイプ」と略す）の出土遺跡分布図である。

このタイプが主体的に出土している遺跡は少なく、太平洋岸の大淀川流域と志布志湾岸沿いに分布の中心がある。また、小牧遺跡の西を流れる串良川をはじめとした肝属川流域にも点在し、鹿児島湾岸の柘原・武・草野貝塚や、万之瀬川流域からも出土しているが例は少ない。文様の特徴は、小牧・中原・倉園A・柳井谷・本野原遺跡などの九州東南部の遺跡からは平行沈線間を円形刺突文で充填するような擬縄文的要素を感じさせるのがみられ、鹿児島湾岸や万之瀬川流域の遺跡からは同心円状のモチーフや、胴部上位に斜位に垂下する平行沈線文を基軸とした「人字形（ひとじがた）文」に似た文様をもつものが多い。胴部の文様を描く沈線は、宮崎平野～志布志湾沿いと万之瀬川流域は2本単位で、鹿児島湾岸は3本単位で、文様帯の幅が広い。3本線により文様を描く特徴は福田KⅡ式に類似する。指宿式土器は新相になるほど文様の規格が崩れ、文様帯が胴部上位に集約されることが知られ、中原タイプの方がやや古相であるといえる。今回の集成作業では薩摩半島側の「人字形文」をもつ指宿式との関連も窺える。

小牧遺跡出土の中原タイプと指宿式土器は、時間差と地域差を併せもっていると考えられ、その概念を図化した

たのが第8図である。時間的には、胴部文様が中原タイプに多い枠内斜行文から指宿式土器にみられる音符文への変遷や、渦巻き文の両側に施す平行線や斜線から人形文への変化がみられる。また、地域差としては、胎土に金色雲母を多く含む中原タイプとピンク色や紫色に発色する指宿式土器を両端にして、それぞれ遠ざかるにしたがって、その特徴がみられなくなる傾向がある。口縁肥厚帯が明瞭な中原タイプと、肥厚しない口縁部をもつ指宿式土器も地域的勾配がみられる。

第6図は小牧遺跡Ⅸa類に類似する上面施文タイプの土器（以下小川添タイプと仮称する）の出土遺跡分布図である。中原タイプとは分布の重なりがみられるため両型式の存在した時期が近いことが想定されるが、出土量は小牧遺跡も含めて相対的に少ない。小牧遺跡での土器に付着した炭素年代測定では、中原タイプに近い土器（掲載番号785）が2502-2436CalBCで、小川添タイプ（掲載番号204）が2410-2278CalBCであり、近い年代であることがわかる。このことから集団の規模の一时的な縮小や小川添タイプが製作・使用された期間が短期であったことなどが想定される。文様の特徴としては、胴部が無文化する。九州東南部はより幅広の文様帯をもち、文様構成が複雑である。小川添タイプの鹿児島湾岸や万ノ瀬川河口付近における分布は薄い。南大隅町根占前田遺跡や錦江町立神遺跡では開間岳噴出物（黄ゴラ）が付着した指宿式土器の出土例がある。小川添タイプと黄ゴラとの上下関係は明らかではないが、小川添タイプの分布の状況と開間岳の噴火による人々の生活への影響は無関係ではないと考える。



第4図 縄文時代後期前半の折衷土器と建物跡1号ピット内出土の石皿



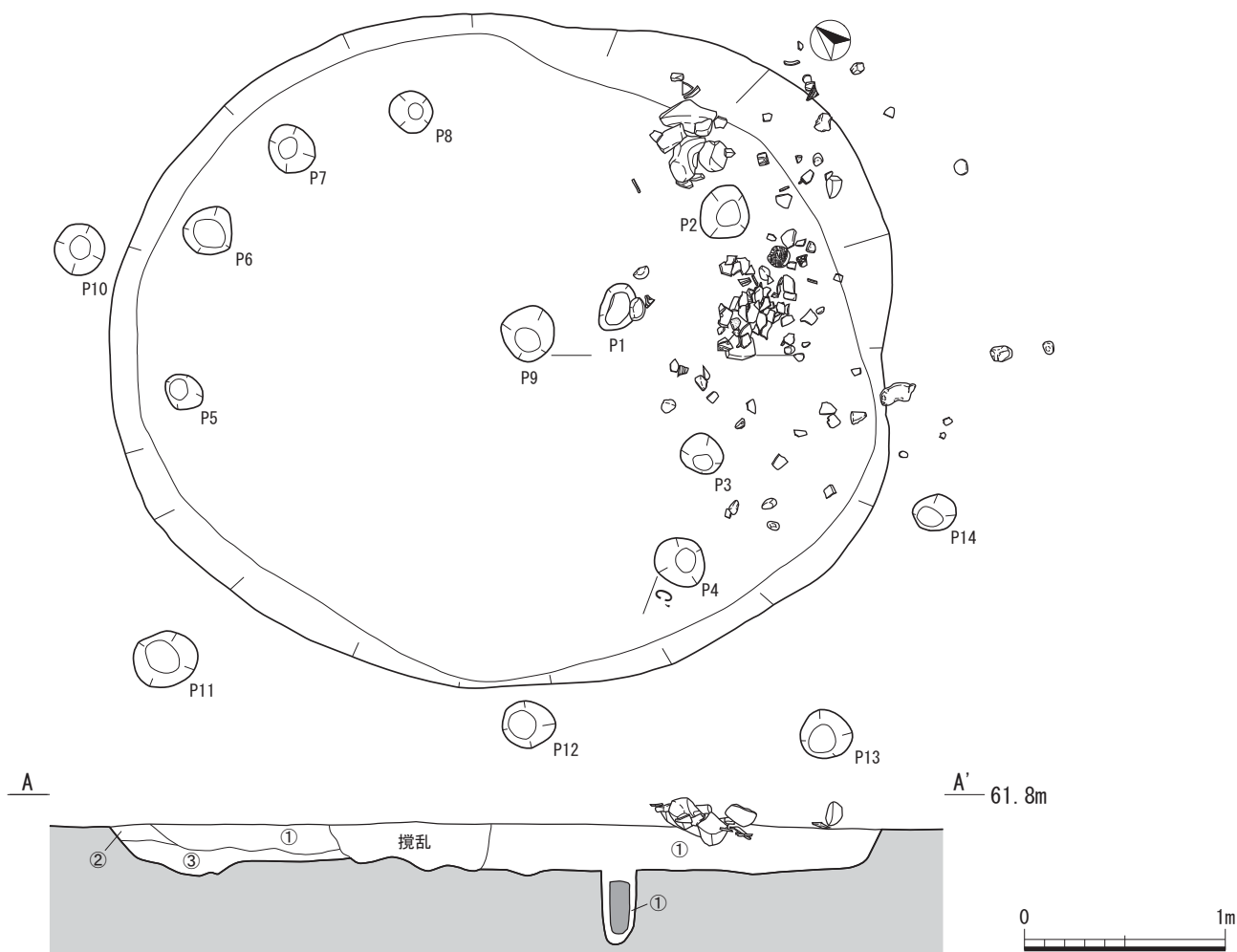
中原タイプおよび肥厚タイプと小川添タイプの折衷タイプと考えられる資料が第7図である。薩摩半島側の指宿式土器は、口縁部波頂部の内面などに局所的に文様を描くものが多くみられ、『小牧遺跡4』でも数例が報告された。ここではそれらを除き、口縁部内面上位に文様を巡らせるものを集約した。折衷タイプの口唇部文様帯はすべてが沈線のみ、あるいは円形刺突を1段加えた簡素な構成である。小牧遺跡よりも申良川上流の鹿屋市田原迫ノ上遺跡には、より全体形の分かる資料がある。小牧遺跡から出土した7にも見えるが、胴部の文様は小牧遺跡や中原遺跡のものとは違い、線の始点・終点の刺突が甘く、やや粗雑な印象を受けることから、後出する可能性がある。また、鹿児島湾岸の鹿児島市帖地遺跡・同市草野貝塚・垂水市終原貝塚出土例は「人字形文」に近い文様を描くと推測される。

まとめとして、小牧遺跡の780・776のような口唇部文様帯が発達したものと捉えられる7は、緑帯文系土器の影響をより強く受けた東南九州の特徴を強く持つ指宿式の時期の土器であるⅧa類(中原タイプ)→松山式古相と考えられるⅨa類(小川添タイプ)へ変遷していく過渡期の資料の可能性はある。鹿児島湾岸や薩摩半島の中

原タイプのように口縁部に肥厚帯をつくる土器の文様パターンには共通性がみられることから、ある時期の指宿式土器のエリアごとの変遷・併行状況を推察できる可能性があるが、例が少なすぎるのが課題である。そして過渡期の資料が鹿児島湾岸と申良川流域にみられることは注目される。小牧遺跡からは指宿地方などの薩摩半島側の胎土の土器が数点報告されており、中原遺跡からは報告されていない。縄文時代後期前半の小牧遺跡は宮崎市田野町本野原遺跡などと同じ東南九州文化圏にあり、薩摩半島側との関わりももっていたエリアであったことが報告される。小川添タイプを、中原タイプの口縁部文様帯と薩摩半島の指宿式土器の波頂部内面の施文文化との出会いと考えると、折衷土器の分布状況から過渡期の、高隈山麓を伝って鹿児島湾と志布志湾間の人々の動きがみえないだろうか。小牧遺跡の折衷土器は松山式土器のはじまりについて考えるうえで重要な資料となる。ただし、小川添タイプや松山式土器の胴部が無文となる点については、小牧遺跡では明らかにすることができず、今後の課題である。

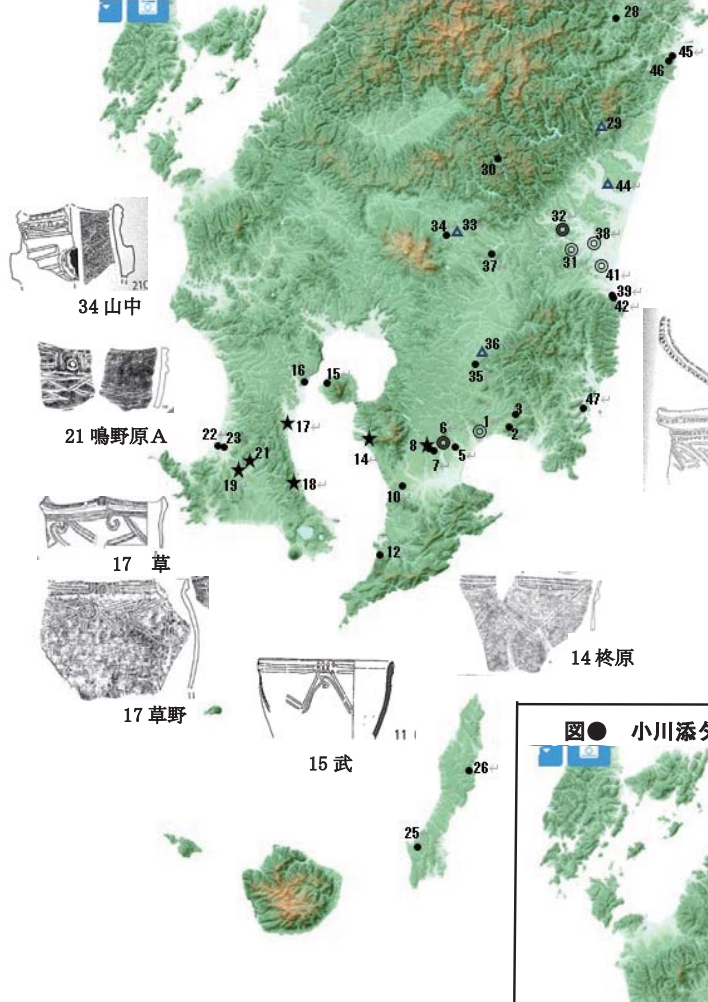
(4) 竪穴建物跡1号ピット内の立石

竪穴建物跡1



第5図 竪穴建物跡1号ピット内の石皿出土状況

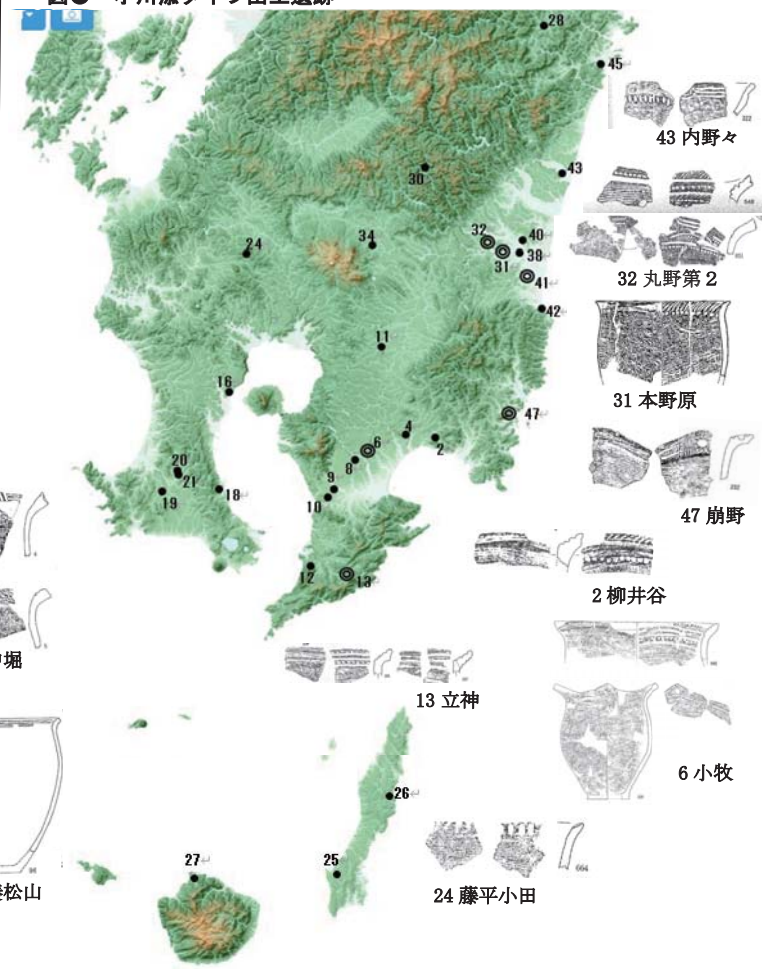
口縁部肥厚タイプおよび折衷タイプ 出土遺跡



※地図中の番号は第●表の番号に対応する。

- ◎…中原タイプ類例が10点以上報告される遺跡
- …中原タイプが10点以上と折衷タイプが報告される遺跡
- …中原タイプが少数報告される遺跡
- ★…中原タイプが少数と折衷タイプが報告される遺跡
- △…小牧Ⅷb 類類似例が出土する遺跡

図● 小川添タイプ出土遺跡

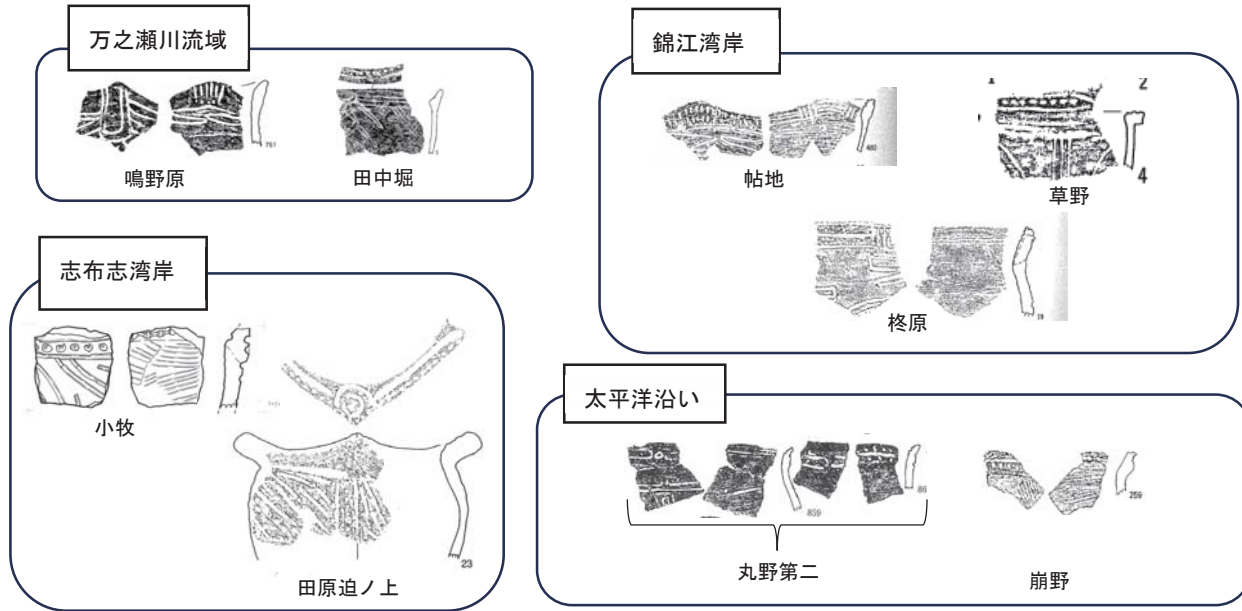


- ◎…小川添タイプ類例が10点以上報告される遺跡
- …小川添タイプが少数報告される遺跡

※NON SCALE

第6図 中原タイプ、肥厚タイプおよび小川添タイプ出土遺跡

図● 口縁部肥厚タイプと小川添タイプの折衷形土器資料



※NON SCALE

【小牧遺跡類似資料出土遺跡一覧】

※◎・・・10点以上報告 ○・・・1～9点の報告 ●・・・可能性のあるものが出土するが小片のため不明 一・・・詳細不明

番号	エリア名	遺跡名	所在地	阿高 (小牧遺跡 V類)	宮之迫 (小牧遺跡 VI類)	中原タイプ (小牧遺跡 VIIa類)	肥厚タイプ (薩摩半島の 指宿式)	小川添タイプ (小牧遺跡 IX a類)	指宿 (小牧遺跡 VIIb類)	折衷 タイプ	報告書・文献刊行年・機関名・番号
1	志布志湾岸・大隅	中原	志布志町	◎	◎	◎			◎		1985 志布志町教育委員会 (9)
2		柳井谷	志布志町	○	○	○		○	○		1984 志布志町教育委員会 (6)
3		倉園A	志布志市志布志	◎	◎	○					1981 河口貞徳 2023 志布志市教育委員会 (16)
4		山ノ口	志布志市有明町	○	○			○	○		2017 鹿児島県立埋蔵文化財センター (188)
5		下堀	大崎町		●	○			◎		2005 大崎町教育委員会 (5)
6		小牧	鹿屋市串良町	◎	◎	◎		◎	◎	○	2024 鹿児島県埋蔵文化財調査センター (52)
7		町田堀	鹿屋市串良町			●			○		2018 鹿児島県埋蔵文化財調査センター (20)
8		田原迫ノ上	鹿屋市串良町		◎	○		○	○	○	2016・2022 鹿児島県埋蔵文化財調査センター (5) (47)
9		中ノ原	鹿屋市		○			●	◎		1989 鹿児島県立埋蔵文化財センター (48)
10		横山3	鹿屋市	○	○	○	○	○	◎		2017 鹿屋市教育委員会 (90)
11		桐木耳取	末吉町					●	○		2005 鹿児島県埋蔵文化財調査センター (91)
12	錦江湾岸	前田	錦江町根占		◎		○	◎	◎	○	2002 根占町教育委員会 (11)
13		立神	錦江町田代					◎	◎		1988 鹿屋市教育委員会 (9)
14		椋原貝塚	垂水市	○			○		◎	○	2006 垂水市教育委員会 (9)
15		武良塚	桜島町	○	○		●		◎		1998 奈良大学考古学研究室調査報告書
16		大瓶	鹿児島市	●	●			○	◎		1979 鹿児島市教育委員会 (1)
17		草野貝塚	鹿児島市		○				◎	○	1983・1988 鹿児島市教育委員会 (4) (9)
18		帖地	鹿児島市善入町		◎		○	○	◎		1999 善入町教育委員会 (5)
19		万之瀬川流域	田中堀	南九州市川辺町	—	—			○	◎	○
20		室園B	南九州市川辺町		○			○	◎		2008 鹿児島県立埋蔵文化財センター (123)
21		鳴野原A地点	南九州市川辺町	◎	◎			○	◎	○	2011 鹿児島県立埋蔵文化財センター (156)
22		渡畑	南さつま市金峰町	◎	◎		●		◎		2010 鹿児島県立埋蔵文化財センター (151)
23		上水流	南さつま市金峰町	◎			●		◎		2007 鹿児島県立埋蔵文化財センター (113)
24	北薩	小川添	伊佐市大口	—	—	—	—	○	—	—	1943 寺師見國
25	種子・屋久	藤平小田	南種子町		◎	●		○			2002 南種子町教育委員会 (9)
26		浅川牧	西之表市		○	●		●	○		1994 鹿児島県立埋蔵文化財センター (10)
27		一湊松山	上屋久町		○			●			1981 上屋久町教委委員会 (26) 1996 鹿児島県立埋蔵文化財センター (19) 2023 宮崎県埋蔵文化財調査センター (264)
28	宮崎県山間部	羽子場	美郷町		●	●		●			2023 宮崎県埋蔵文化財調査センター (264)
29		石河内本村	木城町		◎				●		2000 木城町教育委員会 (6)
30		田代ヶ八重	須木村		○	●		○	○		1992 宮崎県教育委員会
31		本野原	田野町		◎	◎		◎	◎		2006 宮崎市教育委員会 田野町文化財調査報告書 (53)
32		丸野第2	田野町		◎	◎		◎	○	○	1990 田野町教育委員会 (11)
33		永野	小林市		◎	◎			●		2004 小林市教育委員会 (17)
34		山中	小林市			○		○	○		2010 小林市教育委員会 (4)
35		小迫	都城市		◎	○			○		2021 宮崎県埋蔵文化財調査センター (257)
36		中床丸	都城市		◎				○		2016 宮崎県埋蔵文化財調査センター (239)
37		吉年田	高原町		○	○	●				2007 宮崎県埋蔵文化財調査センター (154)
38	宮崎県太平洋沿	竹ノ内	清武町	○	○	◎		○	●		2000 宮崎県埋蔵文化財調査センター (27)
39		曾井貝塚	宮崎市清武町		○	◎			○		2020 宮崎市教育委員会 (137)
40		上の原第2	宮崎市		○	○		○	○		2000 宮崎県埋蔵文化財調査センター (25)
41		右築ヶ迫	宮崎市	◎	◎	◎		◎	◎		2000 宮崎県埋蔵文化財調査センター (21)
42		松添	宮崎市清武町		○	●					2019 宮崎市教育委員会 (125)
43		内野々	都農町					◎	○		2011 宮崎県埋蔵文化財調査センター (202)
44		藤山第1	新富町						○		2007 宮崎県埋蔵文化財調査センター (142)
45		野首第1	高鍋町			●		●			2007 宮崎県埋蔵文化財調査センター (157)
46		南中原第1	高鍋町			●					2008 宮崎県埋蔵文化財調査センター (179)
47			崩野	南郷町		◎	●		◎	○	1990 南郷町教育委員会 (2)

第7図 中原タイプ・肥厚タイプと小川添タイプの折衷タイプおよび関連遺跡一覧



竪穴建物跡1号ピット内(P1)の立石については『小牧遺跡4』に記載がなかったので、実測図を含めて報告する。8は花崗岩製の石皿であり、おおよそ4分の1に分割したものの一つであると考えられる。側面と背面の一部を除くと、ほとんど風化しており本来の面を残していない。使用による磨面がわずかにみられ、網掛けで示した。凹面が深く凹んでおり、少なくとも深さ28mmはあると考えられる。掻き出し口と考えられる部分の割れ口は、整えられたのではないかと推測される。残存する法量は、長さ25.0cm、幅17.4cm、厚さ12cm、重さ7,350gである。

竪穴建物跡1号は径約3m50cmのほぼ円形をなし、中心からやや東南方向寄りにP1は位置している。発掘調査時の所見では、竪穴建物跡の床面と平行に石皿の破断面をあわせ、その差は15cmと記録されている。図面上では、断面図の位置がずれていることによるのかもしれないが、床面から5cm下に破断面がある。ピットは石皿に合わせたように掘られており、ピット内の埋土はアカホヤ火山灰(約7,300年前)であるVa層の混ざり込みが顕著であると記録されている。報告書4では竪穴建物跡と同じ埋土①としているが、池田降下軽石はなく別々の埋土であると考えられる。ピットが掘り込まれた時期については言及されていないが、少なくとも竪穴建物の使用時もしくは廃棄後埋まり切らない状態の時に、掘られたと考えられる。

石皿配石は、土器が集中したのと同じように竪穴建物

の埋土が20cm以上堆積した後のものである。43cm×54cmの範囲に、2点の石皿片と少なくとも9点の礫で構成される。石皿S008は3分の1ほどに割られた花崗岩製で、かなり使い込んでいる。埋土上部は指宿式土器が主体であり、2期に位置づけられる。このことから、竪穴建物跡1号は縄文時代後期前半に集落がつくられた中でも、最初期からあった竪穴建物跡の一つと考えられる。

#### (5) 集石28号周辺

集石28号については、石皿配石として報告した。第1エリアとした石皿立石遺構が環状に配置されたエリアに位置する。その南側をみると、石皿片(報告書4掲載番号S738・S750)や立った状態で出土した9の礫(44597と注記)があり、両者に関係がうかがえる可能性があることから改めて報告する。集石28号は凹面を上にして置かれた石皿(報告書4掲載番号S143)の周りに9個の礫が配置されている。その南側1m50cmに2点の石皿片があり、75cmのところ立った状態で出した礫(9)がある。整理作業の段階では使用の痕跡を捉えることができず自然礫と判断した。発掘調査時に撮影した写真を精査する作業においてこの礫の出土位置と出土状況の不自然さに着目し、礫の詳細な観察および再評価を行った。膨らんだ方を上にして直立した状態で出土しており、調査に携わった人物にも確認した。掘方は確認されていないが、意図をもって立てられたと考えられる。

9は長さ22.5cm、幅5.2cm、厚さ3.3cmで、粘板岩製



第8図 地理的および時間的変遷の概念図



の棒状の形態である。上面先端部分に敲打の痕跡がみられ、下面には敲打により階段状に剥離することから棒状の叩石として使用されたと考えられるが、自然面を多く残し使用の頻度は低いと推測される。上面先端の膨らんだ部分を中心に被熱による赤色化が認められ、また被熱による表面の剥離も観察される。

出土地点は円形窪地の中心付近であり、周辺出土の土器から1期に該当すると考えられる。石皿配石を女性の象徴とするならば9は石皿立石よりは小ぶりではあるが、男性を象徴したと考えられる。

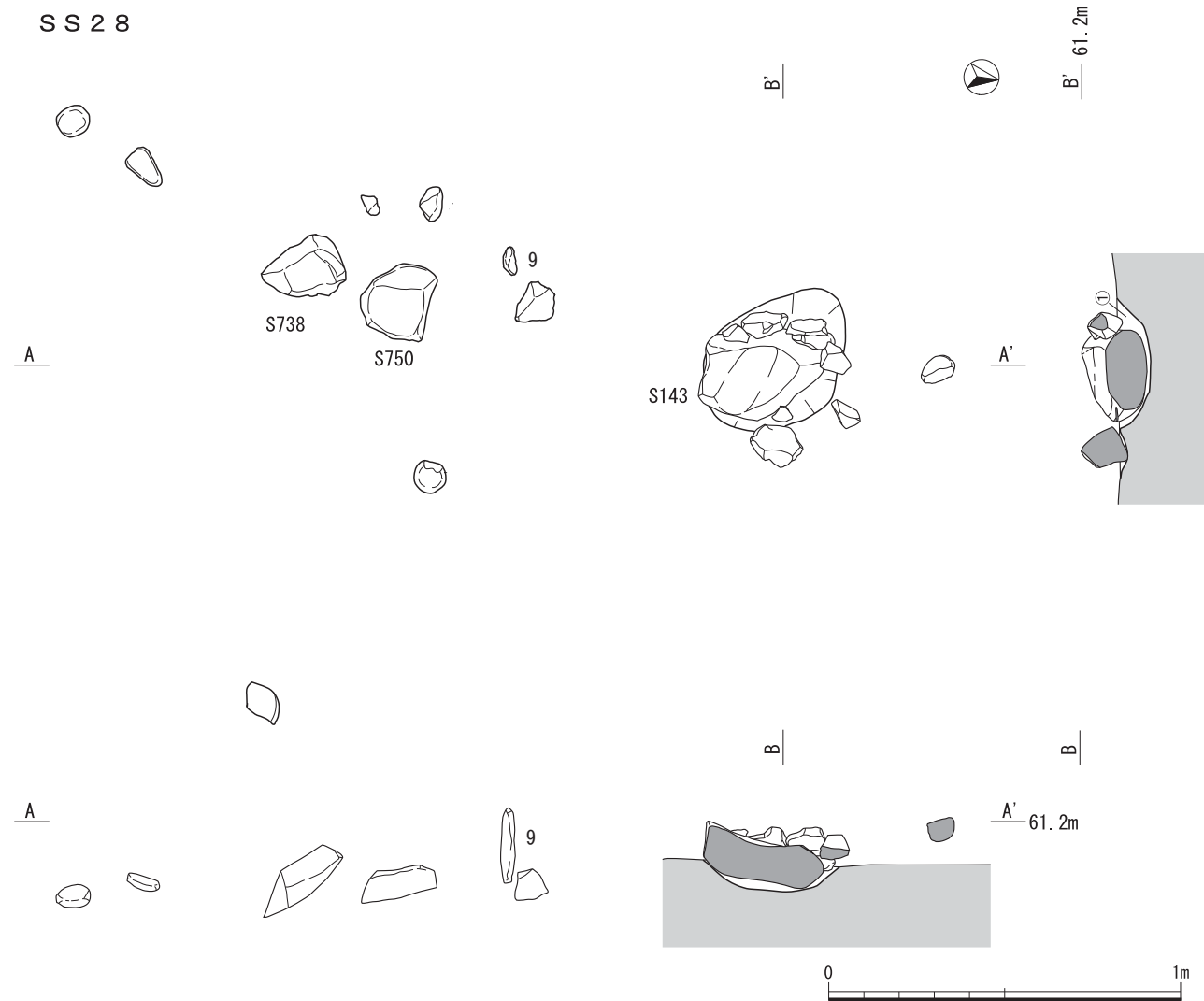
#### (6) 集石60号

石皿配石とした集石60号と礫集石とした土坑38号は、平面で見ると竪穴建物跡19号と重なって検出されている。ただし、検出レベルをみると、竪穴建物跡19号の埋土が10cm以上堆積した後、両者とも掘り込まれており、後出のものであることが分かる。なお、両者が同時に掘り込まれたかどうか断定できない。竪穴建物跡19号からの出土土器はないが、周辺は3期に位置づけられている、したがって、集石60号と土坑38号の礫集中は、集落

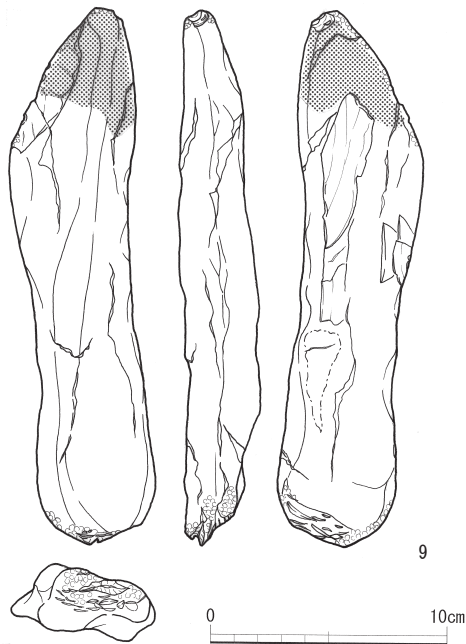
内では最も新しい時期に位置づけられる。発掘調査時に記録された土坑38号の注記をみると、最初に出土した石皿片を記録して取り上げると、次の花崗岩片が続けて出てきたことから、石皿立石を認識したとしている。したがって、礫集中よりも石皿立石と捉えた方が良いと考える。

集石60号は、掘り込みをもち、石皿を模した軽石加工品を最初に置いている。S171は両面とも深い凹みをもち、検出時点では完形品であったとのことである。一面が5.2cmの凹みであり、被熱のためか朱赤色の部分と黒色化した部分が見られる。S171を覆い被せるようにS170の石皿や50cm大の礫を配置し、32点の礫を置いている。掘り込みの表面に焼けた痕跡はみられなかった。全ての礫が被熱していると報告されていることから、石皿などを配置した時に火を用いた行為があったと考えられる。

軽石を長年使用した石皿に模して加工する点は特別な行為であり、石皿とともに配置し、加熱していることは非日常的である。石皿を模した軽石加工品は土器集中13号で出土したS186もあり、S186は2期のもので、集落が終焉を迎える頃まであったと考えられる。凹んだ石皿



第9図 立って出土した礫

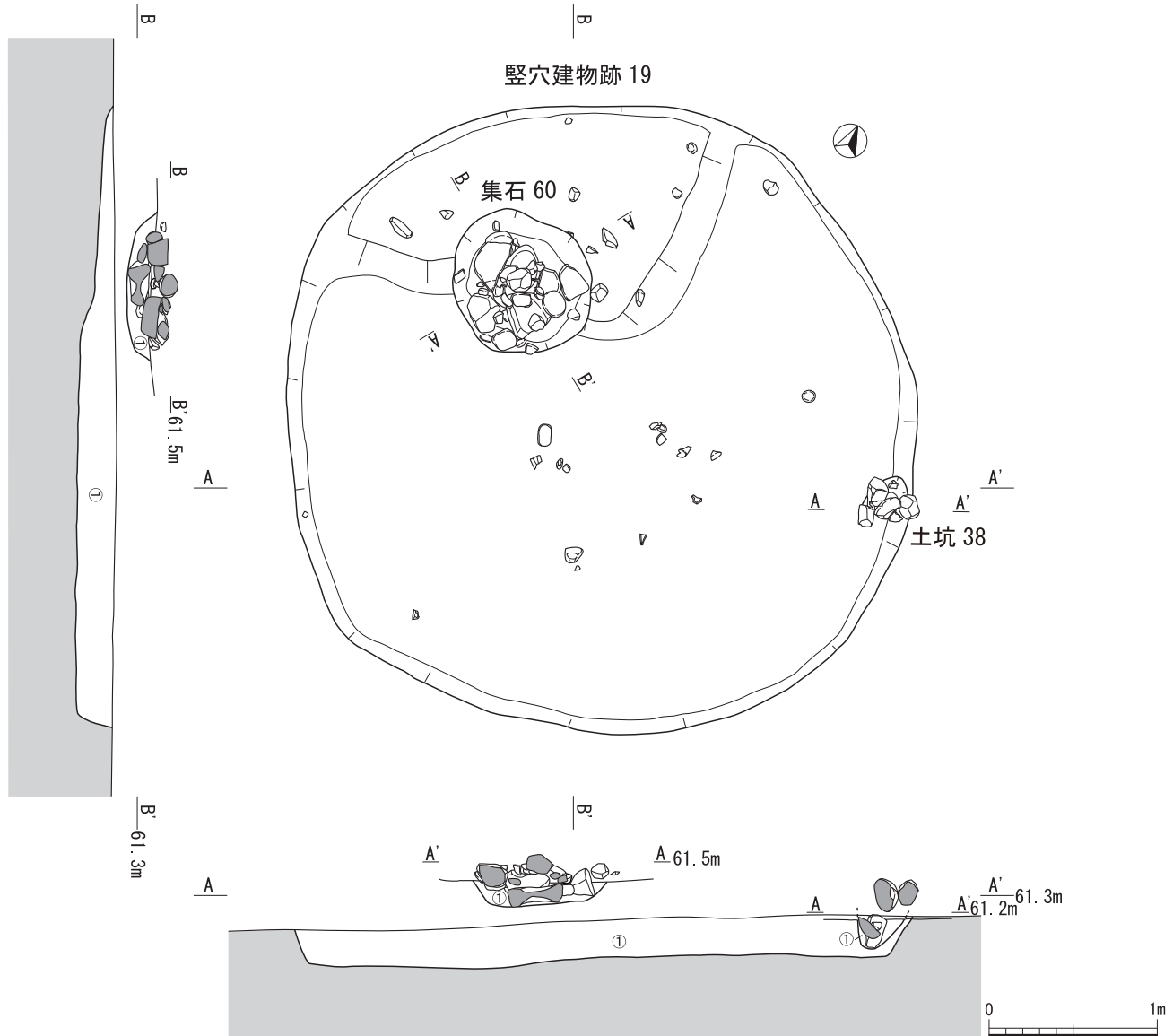


第10図 石皿配石28号と立って出土した礫

の代わりに加工しやすい軽石を使用するのは、目的とする石皿が準備できなかった時その一つだったのではないかと考えられる。集石60号は前述のように集落の終焉を迎える時期に相当することから、急遽、軽石を代用しなければならなかったことも想定される。石皿を使った非日常的な行為は、当時どのような場面で行われたのか、定期的だったのかどうか、どのような想いが込められていたのかなど、当時の生活に迫るには課題が多い。その中で、集石60号は手が込んだ丁寧な行為がみられ、土坑38号の石皿立石と併せて、集落を離れることを意識して遺構を残したのではないかと推察される。急に集落を放棄しなければならなかった要因の一つが、後述する黄ゴラを噴出した開聞岳の噴火だったのではないかと考える。

(7)立石遺構32号土層断面

S221とS222は縄文時代後期前半の集落域東端で重なった状態で、凹面を上にして出土した。発掘調査区の南端にあたり、発掘調査時には出入り口用の階段がつく



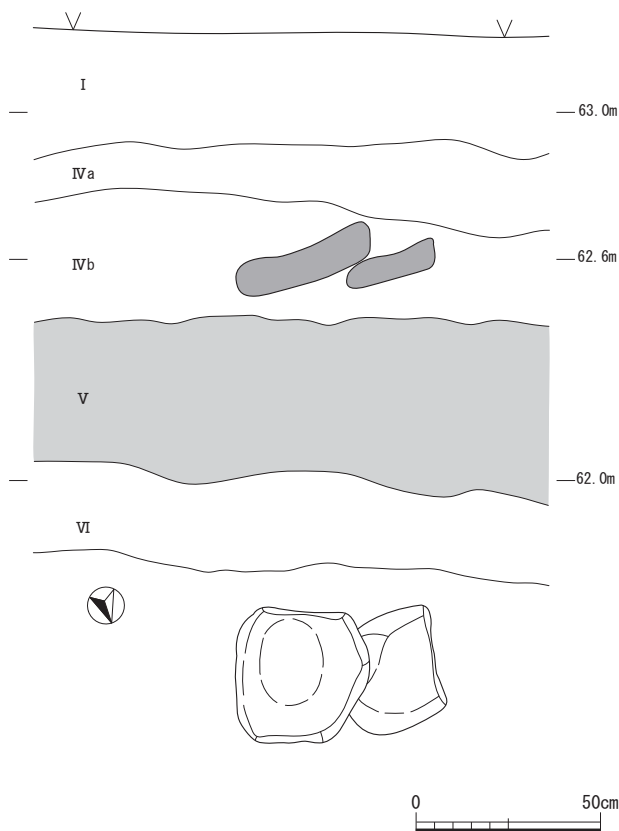
第11図 竪穴建物19号・集石60号・土坑38号

られていたため、最小限の記録にとどまったようである。第12図は土層断面図に出土状況を当てはめたものであり、IVb層内で出土したことが明らかである。惜しむらくは断面についての注記がないことである。出土状況の写真では石皿上面の土色が変わっており、両方の石皿上面に約4cmの厚さでIVb層とは異なる土が堆積している状況が窺える。色調が明赤灰に近いことや、粒子がIVb層よりも粗い点が写真から読み取れる。仮に開聞岳噴出の黄ゴラであるとすれば、集落の終焉に係わる一つの要因となり得るのではないかと考える。成尾英仁氏による黄ゴラの分布範囲の端に小牧遺跡はかかることから、矛盾しない。石皿凹面を実体顕微鏡で観察したが、開聞岳由来のスコリアを確認することはできなかった。火山灰に詳しい鹿児島県立埋蔵文化財センターの山下智沙子文化財主事によると、石皿表面がきれいに洗われており、埋土の砂粒などは確認できないとのことである。また、石皿の凹んだ部分には地層を浸透した雨水が溜まって土が変色した可能性も考えられるとのことである。

#### (8) 石皿を伴う遺構の検討

小牧遺跡で石皿を伴う遺構の様相が明らかになったことにより、これまで報告された遺跡を見直す必要がある。その一つが山ノ中遺跡である。

山ノ中遺跡は鹿児島市西別府町に所在し、急傾斜地において標高100m前後で、約2,000㎡の狭い緩斜面に位置する。小牧遺跡と始まりは同時期であるが、終焉は指立石遺構32号



第12図 石皿S221・S222の出土状況

宿式土器期であり小牧遺跡より一足早い。18基の竪穴建物跡と土坑、石組み炉2基が検出された。4号住居跡の床面に掘り込まれた土坑には、3分の1程度に割れた石皿が立った状態で出土しており、石皿立石とみられる。また、石組み炉とした石皿片を含む7個の礫からなる遺構は、4号住居跡の土坑から2.5mの位置にあり、同時性の可能性がある。同じく屋外炉とした遺構は14個の礫からなり、円形に礫を並べ3個の礫は内側にあり、礫集中と同様の行為とも考えられる。これらの遺構について小牧遺跡例をとおして改めてみると、それぞれの遺構が非日常的な行為としてつくられた可能性も出てきた。また、厚さ11.6cmの安山岩製の石皿（報告書掲載番号771）が二分割されている点も、使用されなくなった石皿を故意に割っている。山ノ中遺跡は面積も狭く小規模な遺跡であるが、精神文化として同時期の小牧遺跡と共通点があったと考えられる。

藤平小田遺跡は南種子町島間に所在し、海岸線から直線距離約400mにある標高50m前後の台地上にある。縄文時代後期前半から後半の指宿式土器、松山式土器、市来式土器、丸尾式土器、丸尾式土器の系譜をひく在地系土器、一湊式土器、納曾式土器に伴って、石皿を利用した配石遺構65基と大型配石土坑1、大型土坑4基、集石3基、集積1基が確認されている。大型配石土坑は3.8×2.9×0.4mの略円形の皿状の掘り込みに、1m大の礫9個を円形に配するものである。配石遺構は2列に弧状を呈するように分布し、その中心部に近いところに大型配石土坑があり、規則的な配置が指摘されている。配石の多くに石皿が用いられ、立てたり組み合わせられた例もあり、非日常的な場所となっている。小牧遺跡と一時期重なりながら、少し後の時期まで続いた遺跡である。

藤平小田遺跡における配石遺構の中心部分が空洞状になる点は、小牧遺跡の礫集中との共通点があり、故意に石皿を割ったものを遺構に使っている点も、この時期の他の遺跡例と同様である。また、大型配石土坑は宮崎市本野原遺跡の円形に造成した窪地遺構の中心部にある中央配石と同じような性格であると考えられる。

外島遺跡は出水市荘上に所在し、扇状地が野田川によって開析された標高約15mの河岸段丘上に位置する。縄文時代後期中半の松山式土器、市来式土器、北久根山式土器に伴って、石皿を伴う配石状遺構4基と土坑26基が確認されている。石皿を伴う土坑は1類の大型の破片を伴う9基と、3類の掘り込みが浅い5基が報告されている。遺構配置は円形を意識しているようにはみえないが、多くの石皿は割られており、石皿を立てた状態は小牧遺跡と共通しており、小牧遺跡の次の時期の状況がわかる遺跡である。

藤平小田遺跡と外島遺跡の例は、地域としては離れており、松山式土器期は重なるものの小牧遺跡より後出の事例であり、それぞれ形態を少しずつ変えながらも使い終えた石皿を遺構内に使用するという非日常的な行為は維持している。未報告ではあるが、鹿屋市吾平町に所在

する立塚遺跡では、弥生時代初頭にも石皿を立てた土坑があり、縄文時代後期からの伝統が続いている可能性がある。（鹿児島県立埋蔵文化財センター2021）

なお、このような石皿を用いた遺構の初源については、小牧遺跡竪穴建物跡1号と山ノ中遺跡4号住居跡の事例から、竪穴建物内に石皿立石を設けることがより古いということと言えるが、さらにそれ以前の起源がどこにあるのか県内の遺跡で追うことはできない。県外にはどのような事例があるのか含め、今後の課題としたい。

#### 4 周辺地形と歴史的環境

##### (1) 周辺地形

小牧遺跡の地形については、各報告書に25,000分の1図と調査範囲である2,000分の1図で示した。西側を流れる串良川との関係や南北側の低地との位置関係はわかるが、東側の台地との間の地形を示すことができなかった。東側の台地には、縄文時代前期末～中期初頭に位置づけられる深浦式土器が大量に出土した細山田段遺跡が所在する（公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター2019）。小牧遺跡でも同時期の深浦式土器が出土しており、両集落同士は関係が深かったと考えられる。

また、小牧遺跡で37棟の掘立柱建物跡が検出された中世集落にとって、外部からの防御が必要であり、東側台地につながる地形を明らかにしておきたい。等高線が密で複雑に入り組んでいるとおりに、実際歩いてみると一人が通るのがやっとのエッジ状に切り立った箇所が3か所はあり、第14図に示した測量当時（平成15年頃か）よりも侵食が進んでいる感じを受ける。人為的に崩壊させているとは考えられず、自然に東側の台地と切り離されつつある可能性が高い。串良川流域の地形を研究している明治大学の高波紳太郎氏によると、この地点では「谷の切り合い」が見られ、古第三紀の堆積岩が地表近くにあるため、侵食が進みやすいとのことである。さらに、これまでの研究で導き出されたシラス斜面の後退速度から推定すると、縄文時代前期末に近い5,000年前は十分な平坦面が、800年前の中世には現在より若干安定した平坦面が想定されるとのことである。中世の頃を想定すると、台地からの出入口を固めておくとともに、小牧遺跡東側の山頂で見張りさえ嚴重にしておけば、東側台地から攻めてくる大軍にも対応できたのではないかと考える。台地側に残った平坦地の周縁には1mほどの高まりがあり、畑境に土手を築いて牛馬の転落防止用としたのか、あるいは中世まで遡る土塁なのかどうか今後の調査に委ねたい。

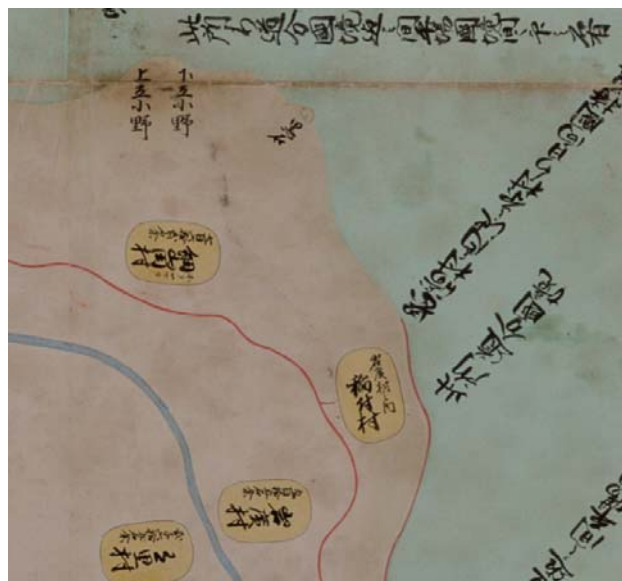
##### (2) 歴史的環境

現在は細山田段遺跡の西端が鹿屋市串良町と曾於郡大崎町の市町村境になっているが、江戸時代の1696（元禄9）年に描かれた『元禄國絵図』（国立公文書館デジタルアーカイブ）に立小野集落や黒石集落南側の岩弘

（岩廣）地内で「此所道分國境」と書かれており（第12図）、大隅国と日向国の国境になっていたことがわかる。細山田段遺跡で検出された2条の溝状遺構が波板状凹凸面を伴うことから、国境の道跡の可能性はある。報告書『細山田段遺跡1』では時期不明の溝状遺構として、下面の平面図しか掲載されていなかった。発掘調査時には的確に記録されており、必要な情報を第14・15図に補足しておく。

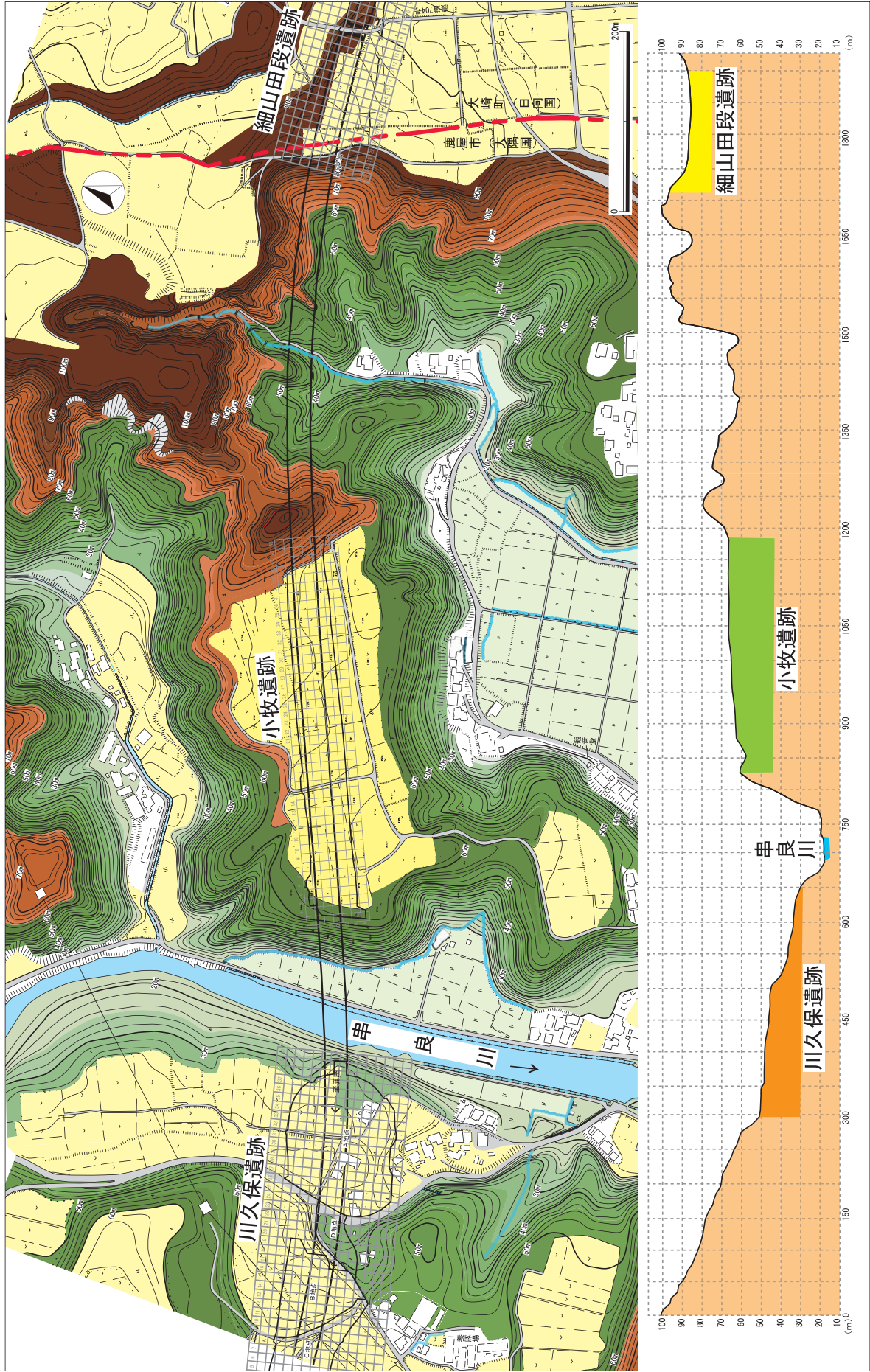
2条の溝状遺構は、西側の台地落ち際に沿うように約80mに渡って検出された。北側に高くなる勾配7.1%の緩い坂道である。東側溝（溝状遺構1）は南端で幅210cm×深さ55cm、北端で幅約300cm×深さ92cmを測る。西側溝（溝状遺構2）は南端で幅170cm×深さ33cm、北端で幅160cm×深さ45cmを測る。両者とも複数の重なった硬化面が有り、床面近くには凹面平均間隔68.6～71.4cmの波板状凹凸面が伴う。両者の前後関係は明らかにできないが、溝状遺構1の方が直線的で規模が大きいため主体的に使われていたと考えられる。さらに調査区北端の西側には、2条の溝状遺構3,4と古道（硬化面）1～8が検出されている。新旧関係が確認できるのは、溝状遺構4より溝状遺構3が新しく、古道7より古道5が新しい。また、古道6より溝状遺構3が新しい。これらの遺構はアカホヤ火山灰（約7,300年前）のV層より上位であるIV層で検出されたことと、両溝とも埋土に近世の遺物を包含しており、いつから道として使われはじめたか不明であるが、近世には使われていたことがわかる。なお、220m南側に位置する地点で、大隅中央区域農業用道路（通称グリーンロード）建設に伴って調査された際も同様な波板状凹凸面を伴う溝状遺構が検出されており、串良町教育委員会によって2005年に報告されている（串良町教育委員会2005）。現在の農道が台地端部の西側縁に位置することから、道は農地の拡張とともに次第に西側へ移った可能性もある。

元禄國絵図の内容が中世まで遡れるのかどうか検討が

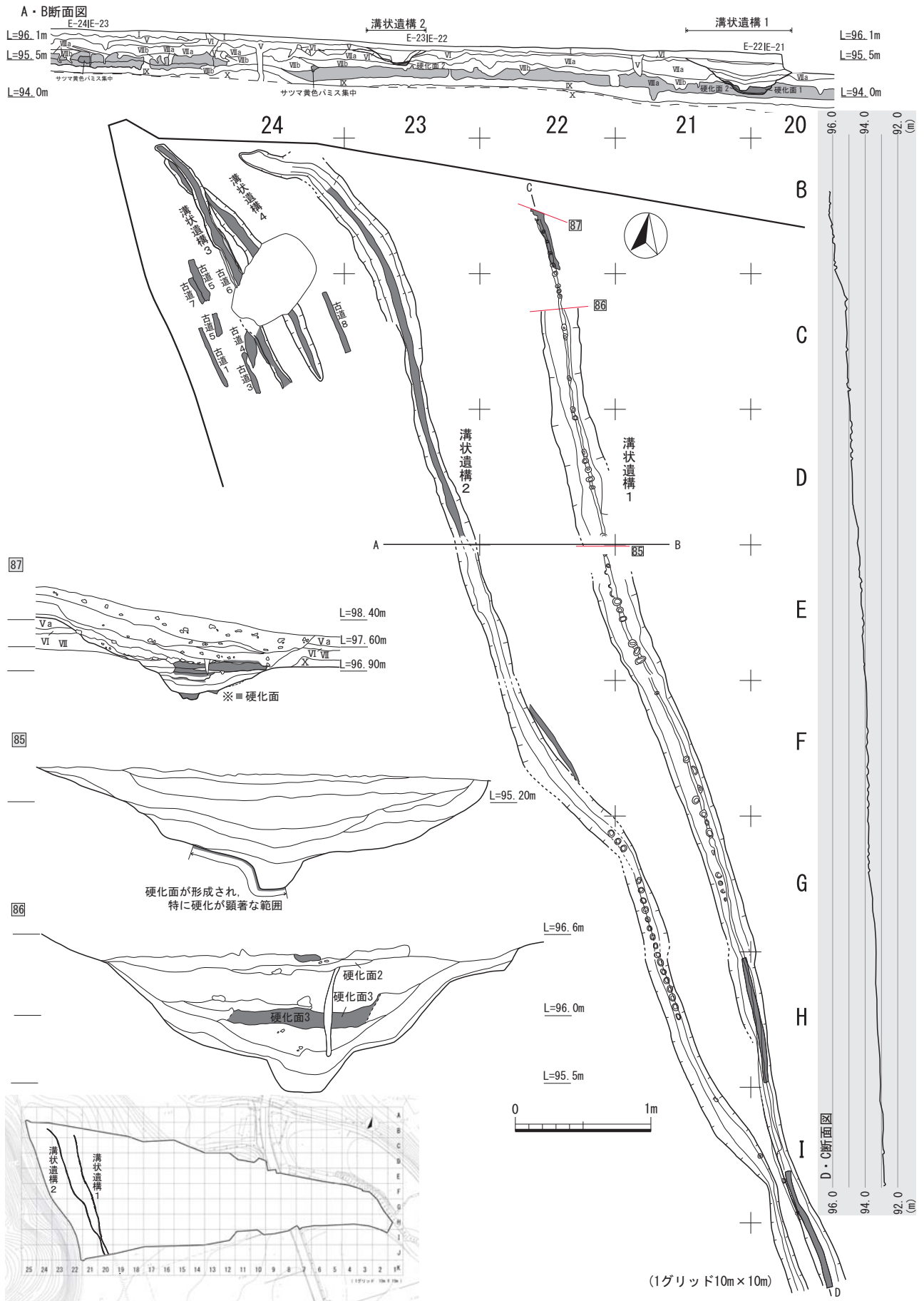


第13図 元禄國絵図に記された大隅国と日向国の国境

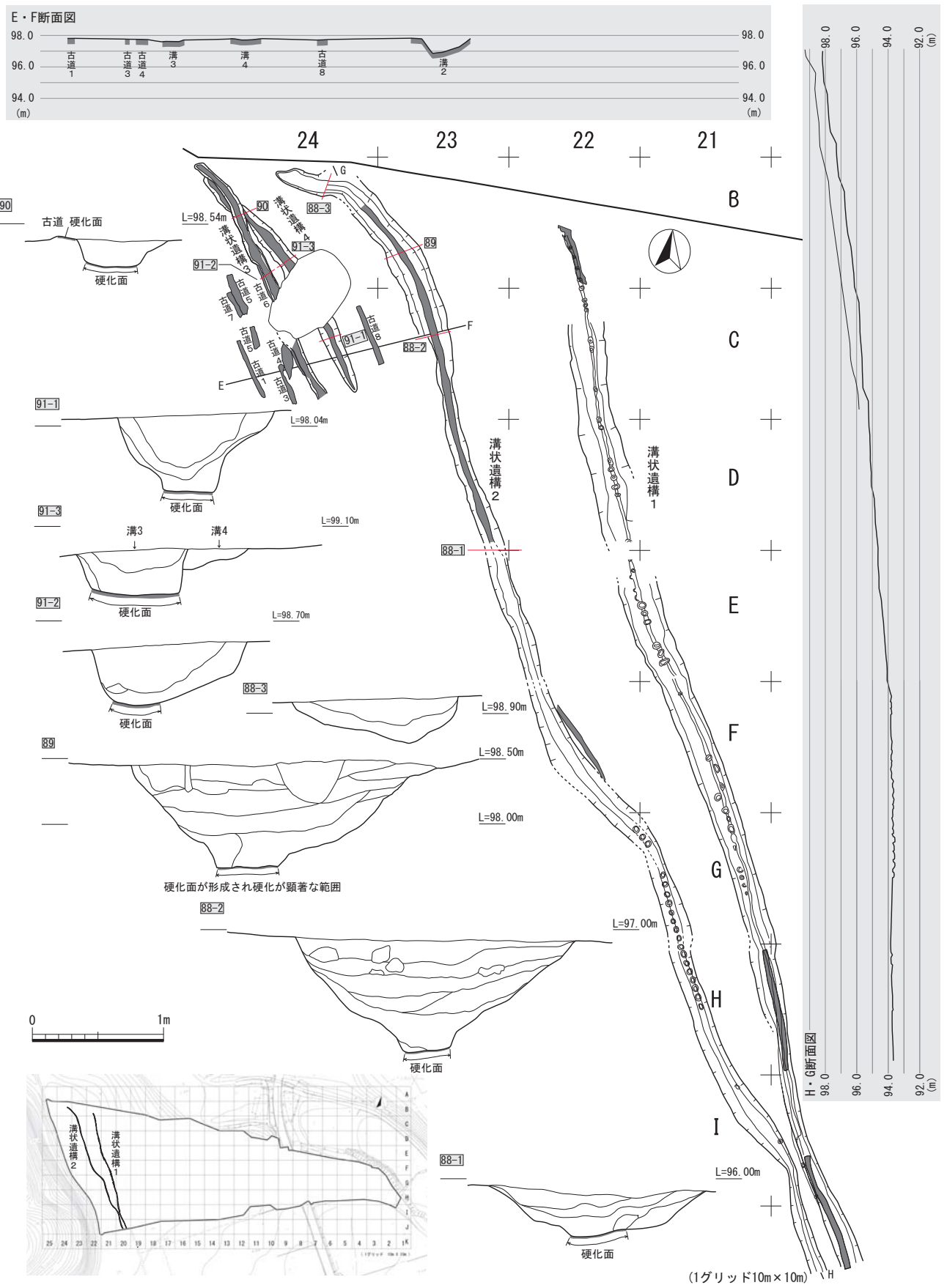




第14図 小牧遺跡の周辺地形



第15図 細山田段遺跡の溝状遺構 (1)



第16図 細山田段遺跡の溝状遺構（2）



必要であるものの、小牧遺跡が国境付近に位置することから、中世において日向国側の勢力に対峙する大隅国側の最前線にあった可能性もある。

#### おわりに

以上、縄文時代後期前半については、東日本の影響を受けて宮崎市本野原遺跡と同じような円形窪地を造成し、石皿を伴う多様な遺構をつくる点、土器の器形や文様に時間差的にも地域差的にも変遷の様相が認められることなど、小牧遺跡には無限の情報が詰まっている。さらに、川久保遺跡や細山田段遺跡との立地や時代背景を考えると、新たな知見で地域史を語ることができる。多くの方々に小牧遺跡を活用していただくことが、担当したものとしての喜びである。

#### 引用・参考文献

※指宿式土器と松山式土器の特徴を併せ持った口縁部片について引用・参考とした発掘調査報告書は、第7図の表右欄に発行機関・報告書Noを記載している。

- 寺師見國 1943『鹿児島縣下の縄文式土器分類および出土遺蹟表』鹿児島縣肇國聖蹟調査会
- 河口貞徳 1981「市来系の祖型と南島先史文化への影響」『鹿児島考古』第15号 鹿児島県考古学会
- 本田道輝 1983「田中堀遺跡の口縁部上面施文型の土器について」『鹿大史学』31号 鹿大史学会  
鹿児島県教育委員会
- 1985 『王子遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(34)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 2006 『山ノ中遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(103)
- 2012 『稻荷迫遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(169)
- 2012 『外島遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(175)
- 2021 『立塚遺跡現地説明会 令和3年11月6日』鹿児島県教育委員会・公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
- 2019 『細山田段遺跡1 ー縄文時代早期及び縄文時代後期以降編ー』(公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(25)
- 2020 『小牧遺跡1 ー古代～近代編ー』(公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(26)
- 2021 『小牧遺跡2 ー旧石器時代～縄文時代早期編ー』(公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書

- (39)
- 2022 『小牧遺跡3 ー弥生時代～古墳時代編ー』(公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(46)
- 2023 『小牧遺跡4 ー縄文時代前期～弥生時代初頭編ー』(公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(54)
- 串良町教育委員会 2005 『細山田段遺跡・瓜々良蔭遺跡』串良町埋蔵文化財発掘調査報告書(12)
- 大崎町教育委員会 2014 『麦田下遺跡』串良町埋蔵文化財発掘調査報告書(7)
- 志布志町教育委員会 1985 『中原遺跡』志布志町埋蔵文化財調査報告書(9)
- 南種子町教育委員会 2002 『藤平小田遺跡』南種子町埋蔵文化財調査報告書(9)
- (文責 東和幸・北園和代)





---

鹿児島県立埋蔵文化財センター

研究紀要・年報 **縄文の森から** 第16号

※なお、本研究紀要は査読誌です

発行年月 2023年11月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号

TEL 0995-48-5811

E-mail [maibun@jomon-no-mori.jp](mailto:maibun@jomon-no-mori.jp)

URL <https://www.jomon-no-mori.jp>

印刷 有限会社 国分新生社印刷

〒899-4301 鹿児島県霧島市国分重久627-1

---